

未来眼やまがた 第8回

女性の持つ多様性の活用に向けて

「ベルサイユのばら」を代表作とする劇画家として、また声楽家、作家、プロデューサーとしてご活躍中の池田理代子さん。女性の能力を活かすために必要なこと、47歳で東京音楽大学に入学し、音楽家デビューの夢を実現させたこと、また人生に大きな影響を与えた恩師との出会いなどについてうかがった。

■ アドバイザリー・ボードとして

町田 池田さんには、荘内銀行に対してさまざまなご提言をいただくアドバイザリー・ボード・メンバーの一人として、日頃から大変お世話になっております。

池田 私は経済や金融などの分野に疎く、元日銀マンの夫（現・東洋大学教授 賀来景英氏）から、いつもばかにされています。

今年5月のアドバイザリー・ボード会議に参加させていただきましたが、メンバーの方は金融の専門の方や学者の方など、すばらしい方ばかりで、楽しく勉強

させていただきました。

町田 会議では貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。実は、池田さんにメンバーをお願いした背景には「荘内銀行がこれから女性の能力をもっと活用するためにどうしたらよいか」という課題があります。

荘内銀行は、リテール・バンキングつまり個人のお客様のための銀行という観点から、家計を管理している女性のニーズが分かる女性社員に、さらに活躍してもらいたいと思っています。同時に、女性社員の上司である男性がそのことを理解し、女性社員の能力をどれだけ引き出そうとしているかが重要です。

そのため池田さんには、女性社員にとっては「目標」として、女性の部下をもつ男性社員にとっては「意識改革のきっかけ」としての存在になっていただきたいという願いがあります。

■ 女性の強みは多様性

池田 男性は小さいころから、社会に出るための心構えや訓練を受けて育つのにに対し、女性はそうしたことが少ないと思います。

ただし、女性を活用することの大きなメリットは「多様な価値観」でしょう。多くの男性は会社に入ったら「出世するのがあたり前」という価値観を持っているのに対して、女性には多様な働き方や人生のあり方があります。

たとえば「8時間ではなく、4時間働いて残りは家事など他のことに時間を充てる」という女性もいますし、出勤時間も「みんなと一緒に8時からの出勤ではなく、お昼から働く」という女性もいます。

このような女性の働き方は、社会や企業に対して「多様な働き方や生き方がこの世にあるのだ」ということを否応なしに示し、またそれを理解させるきっかけになっていると思います。

町田 「女性の強みは多様な価値観にある」という点は、まったく同感です。そのため荘内銀行では、女性が能力を十分に発揮できるように配慮した人事制度を設けており、それが多少認められて昨年6月には厚生労働



●町田 睿（まちだ・さとる）

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、株式会社富士銀行入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、94年株式会社荘内銀行取締役副頭取就任、95年より現職。

大臣優良賞をいただいた経緯があります。

今の女性は、専業主婦を選ぶ人から社会で活躍する人まで、生き方の選択肢が多いですね。私は、3人の子どもが全員息子で娘を育てた経験がありませんが、娘をどのように育てるかは、息子よりも難しいのではないかと感じています。

池田 私はむしろ、今は若い男性の方が生きにくい時代なのではないかという気がしています。

女性は「ダメでもともと」というところがありますが、男の人はそうはいかない大変さがあります。女性は期待されていない代わりに、いろんな好きなことができるという選択肢があり、それが女性の強みになっていると思います。

町田 経営者として、日頃、社員から現場の率直な声や、企業の抱えている問題点などを指摘してもらい、経営に生かしたいと思っていますが、そこでストレートに問題点を指摘してくれるのは女性と若者です。

池田 それらに共通しているのは「怖いもの知らず」ではないでしょうか。

町田 荘内銀行では、男女の差別はなく常に平等で、総合職や一般職の区分もありません。そのため同期をまとめていくリーダー的な人が女性になるという場合も少なくないようです。

そのリーダー的な女性が同期の男性を「どうしてこんなに保守的なのかしら」と指摘することもあります。

■ 多様性に対応できる企業が生き残る

池田 それは自己保身に要するエネルギーが、男性と比べて女性は絶対的に少ないからでしょう。

しかし、女性が社会に進出していても、世の中がちっとも良くなっていないのではと思います。男性社会のなかで上昇志向を持って働いている女性は、男性と同じように夜中の1時、2時まで残業したり、場合によっては、生活を犠牲にした働き方をしている、それでは男性を真似しているに過ぎないな、と感じることもあります。そうではなく、女性が持っている強みは、社会や企業などに対して、多様性を受け入れるよう促していくことができる点にあると思います。

町田 これからは、働く目的や態様が多様になり、それにふさわしい態勢をつくらないと女性の良さを十分に活かせないと思います。

また、SOHO(スモールオフィス/ホームオフィス)の活用などによって、決められた時間に、決められた仕事をしなければならぬということは、変わっていくでしょう。

池田 おっしゃるとおりですね。ですから、これから



●池田 理代子(いけだ・りよこ)

1947年大阪府生まれ。東京教育大学(現・筑波大学)文学部哲学科中退。95年東京音楽大学声楽科に入学、99年同大学卒業。

東京教育大学在学中に劇画を描き始め、72年に連載を開始した「ベルサイユのばら」が大ヒット、その後も「オルフェウスの窓」や「聖徳太子」などの作品を多数描く。現在はソプラノ歌手としても、音楽会、コンサートで活躍中。また、「渋谷アーツサロン」をプロデュースし、アマチュアのための声楽教室や、フラダンス教室などを展開している。

■池田理代子オフィシャルサイト

<http://www.ikeda-riyoko-pro.com/index.html>

は「あれか、これ」という二者択一の選択ではなく「あれとこれ」の間にいろいろな段階の生き方がある、つまり多様性に柔軟に対応していくことが大事だと思います。

町田 そのような社会の変化や、働く人のニーズ、期待に応じた処遇をきちんと用意していくことは、企業経営にとって重要な課題であり、荘内銀行でもそのような対応をしたいと考え、取り組んでいます。

池田 必ずしも企業が要求した働き方だけを社員が提供するとは限らない時代になると思いますし、働き方のニーズに対して柔軟な対応が出来るかどうかは、企業において死活問題になるでしょう。

一方で、企業が多様な働き方に応じた対応をすることによって、むしろ多様な才能を得ることができるのではないのでしょうか。

■ 劇画家になったきっかけ

町田 池田さんは、劇画家や声楽家、さらに舞踊家など、実に多彩で素晴らしい才能をお持ちで、若い時からそれを十分に発揮されていますね。

池田 ありがとうございます。東京教育大(現・筑波大)の文学部哲学科に入学した時には、将来は学者になろうと思っていました。

町田 大学時代に「ベルサイユのばら」を描かれましたね。幼い頃から劇画家を目指されたのですか。

池田 みなさんがっかりされるのですが、どうしても漫画家になりたかったのではなく、食べていくためにたまたま認められたのが漫画でした。

当時、東京教育大では学園紛争が起り、70年安保

と筑波移転反対の問題を抱え、大学2年の時には学校が封鎖され、授業がなくなりました。

その時、私は「親のスネをかじりながら、社会を批判したりすることは間違っているのではないか」と考え、自分が経済的に自立しなければと、食べるためにいろいろな仕事をしました。

その経験を通じて分かったのは、私は人前に出ることが大嫌いだということでした。とにかく外に出ない仕事をしよう、漫画なら外に出なくてもいいのではないかと、思ったのがきっかけです。

初めは小説も書きましたが、たまたま漫画を描いたら、大学の3年生の時に雑誌でデビューすることができました。最初は食べられるというレベルではありませんでした、次第に食べていけるようになりました。

■ 人生とは何かを考えたいきっかけ

町田 池田さんのインタビュー記事やご執筆された書籍を拝読し、哲学的な方だなと感じていました。

つまり「いかに生きるべきか」ということを、お若いときからずっと考えておられた方だなという印象を持ちました。

池田 私は子供の頃、母からよく「これからの時代は、女の人が男の人に養ってもらえると思ってはいけない」と言われました。また「あなたは不器量だから、お嫁に行けると思わないで一生懸命勉強しなさい、手に職を持ちなさい」と言われて育ちました。

器量が良くないと言われ、子供心に悩みましたが、そのうち人間とは何か、神様とは何かということを考えるようになりました。

私は中学生の頃から自分の意志で教会に行くようになりましたが、それは「神様は外面で人間を差別する

ようなことはなさないだろう、きっと私を受け入れてくださるに違いない」という思いがあったからです。

男性も女性も同じでしょうが、自分のことを「私はぜんぜんもてないな」とか「自分はハンサムだな」と意識することで、生き方がずいぶん変わってくると思います。

しかし、外見は偶然に親からもらったものに過ぎないけれど、内面は自分の力で磨かないとダメだということに気づくことが大事だと思います。すべての人には内から輝く力があり、それを磨いていくことが大切だと考えています。

■ 47歳で音大受験にチャレンジ

町田 池田さんは、47歳で難関の東京音楽大学受験にチャレンジされました。小さい頃から音楽に対する思いがあったようですね。

池田 小学校に入る前にお琴、小学校に入ってからピアノを習いました。はじめは、なかば強制的に習わされたのですが、次第に音楽が好きになりました。

特にクラシック音楽が好きで、中学の頃には将来音大を受けようと受験勉強を始めましたが、すぐ挫折してしまいました。しかし、その頃からずっと「音大に行ってプロの音楽家になりたい」という思いを持っていました。

町田 東京音楽大学の受験では、社会人入試などの特別枠ではなく一般枠で挑戦されたとのことですが、筆記試験だけでなく、実技試験のためのトレーニングなど、受験勉強は大変だったでしょう。

池田 そうでした。音大は私が受験する少し前までは受験に年齢制限もありました。

受験資格の年齢制限が取り払われた時、ちょうど「自分の人生はこのままでいいのかな」と考え始めた時期でもありました。

それでも、受験を決断するまでは5年間も悩みましたが「もしかしたら、子供の頃に憧れた夢が、ようやく叶うかもしれない」という思いで決心しました。

町田 池田さんのお話をうかがっていて、自分が持っている才能を目一杯活かすためのご努力と姿勢に敬服しています。

また池田さんは、宝塚での「ベルサイユのばら」の原物料を寄付されたとうかがったことがあります。持っている才能を自分のためだけでなく、人のために役立てることを大事にされていることにも深く感謝しております。



声楽家としてご活躍の池田さん（2004年長崎ブリックホール）

池田 私は「ベルサイユのばら」を描いていた頃から、自分が得たものは、何らかの形で社会に還元すべきだという気持ちを持っていました。年齢とともに、その気持ちはどんどん強くなっています。

私は自分のことを、本当にやりたいことをやれる才能がある人間だとは思っていません。それでも「ベルサイユのばら」を描けたことは、人にはない、何かの才能を与えられたのだと思います。同時に、そのような才能を神様が与えてくださったことの意味は何かと考えると、それを全うすることが、自分が生まれてきた意味だと思うのです。

町田 すばらしいお考えだと思います。それは池田さんがご自身の持っている才能を最大限開花させてこられた結果、得られた最終的な答えなのでしょう。

池田 そうではないと思います。私には「この世で与えられた才能で、人に勝るものがあつたら、それは神様が何かの目的で私に与えたのだから、私はそれを使って、人にお返ししなければならない」という思いがありました。

■ 人生を教えてくれた恩師

池田 また、私の人生において、音大に入る前に東敦子先生という日本を代表するプリマドンナと出会ったことが大きかったと思います。

先生は、私が音大を卒業した翌年に亡くなられましたが、先生からは生き方だけでなく死に方まで教わったと思います。先生はがんを発病されましたが、手術をすることを拒否され「天からいただいた喉だけは、無傷のまま天に返す」とおっしゃっていました。与えられた才能を天にお返するというのを、先生の生き方を通して教わりました。

町田 その東先生を代母に洗礼を受けられたそうですね。

池田 東先生と出会う前、高校生の頃から洗礼を受けることを勧められていましたが「神様の啓示がありません」と拒んでいました。でも先生に出会って信仰とは理屈ではないと思いました。また、神様がいるか、いないかという2つの選択肢ならば、「神様がいる」と思った方がこの世の中では、まだ救いがあるだろうと思ったのです。

私は、人生とは科学者のように仮説を実証することなのではないかと考えています。人はどう手を尽くしても全てのことを知ることはできません。しかし人は、たぶん〜だろうと、仮説を立てることは出来ます。長い人生とは、このように自分が仮説を立てたことを実証していく過程なのだと思うのです。



1972～73に連載、大ヒットした「ベルサイユのばら」

町田 私自身も、自分の人生を振り返ってみてもこれまでいろんな変遷がありました。

多感な少年時代に抱いた「何のために生きているのだろうか」という素朴な質問に対して、最近少しずつ答えが見えてきたような気がしています。

■ 同世代へのメッセージ

町田 池田さんのご活躍の様子を通じて、また本日のお話を伺って、与えられた才能を十分に発揮し、多くの人に影響を与えておられるとあらためて思いました。

池田 私は声楽をやってみて、やっぱり遅かったな、もう10年早く決心すべきだったなとも思います。でも、この年齢であっても、「努力でここまでできる」ということが、同世代の方々への励ましになればいいと思います。

今、アマチュアの合唱団で第九を歌っておりますが、コンサートでチャリティーとして皆様からいただいたお金を社会に還元することが出来ました。200人近くの合唱団の方々も、歌う喜びだけでなく、音楽を通じて社会に還元できるという喜びを実感しておられるのではないのでしょうか。

町田 これからのますますのご活躍をお祈りしております。今日は大変ありがとうございました。